

＊子どもと衣服＊

## 園服史におけるエプロン

森下みさ子

帯も解けよ、袖もちぎれよ、とばかりに着物の裾をかきあげて走り廻る子どもの傍らに、リボンの付いた帽子をチョコンとかぶり、ヒラヒラなびくエプロンを纏った洋装の子どもの姿がある。この和洋あいまじりあう服装に彩られた園庭こそは、明治二十三年、武村藉靄女史の筆が直載に写しとった女子高等師範学校附属幼稚園の実況であった。

この実況図がいみじくも伝えるように、明治も後期になると、洋装を着飾る風潮は大人のみにとどま

らず、帽子や皮靴、セーラー服などの形で幼い子どもたちの間にも染み亘ってきいてた。中でも白いエプロンは、欧米の子どもたちの風習としてとりいれられるやいなや、和服や外出着の上にも好んでかけられ、幼い者の手近な洋装として愛されたようである。

大正十年、内務省の編纂になる『児童の衛生』は、和服に長めのゆったりしたエプロンを付けて、馬遊びにままごとに余念ない子どもらの写真を掲載

するとともに、「児童服について」の一項を設け、幼児や児童の服が動作上、衛生上、経済上發揮すべき特質を書き連ね、実用に即した衣服を推奨する。

してみるとこの頃には、和服の上とはいえエプロンが園児たちの生活に親しくとりこまれ、同時に子ども服の実用性が人々の意識の表層に浮上しつつあったことがうかがえる。軽く柔かく動きやすく、洗濯がきいて安価なものとして、エプロンは、汚れを厭わず遊び廻る園児らにふさわしい服装と考えられたのであろう。

しかし、こうした実用性とあからさまに結びつく一方で、エプロンは、園児らの動きにあわせて白く軽やかに翻えりながら、もう一つ別の「時代の声」をつぶやいていたように思われる。明治末から大正にかけての婦人雑誌や裁縫誌の端々に、胸にギャザーをたっぷりと畳みこみ、袖口、衿まわり、裾にフリルやレースをあしらひ、肩や背中にふんわりとり

ボンを結んだ、見るからに愛くるしいエプロンの作り方が紹介されているのだ。『児童の衛生』が示す幼児服の諸条件からは抜け落ちて、細やかに手のかけた装飾のあれこれが、やさしく愛らしくエプロンを飾りたてている。実用以上に装飾をほどこされたエプロン……、そこには慎ましやかではあるが、洋風文化の香りを生活の隅々にあとう限りとりこみ、幼い者が身に付けるエプロンの翻えりにも、異国から吹き渡ってくる新しい時代の風を感じとってみたい、と願う人々の想いが活きづいていたのではないだろうか。

明治四十三年、夏目漱石が著わした小説『門』には、當時を反映して、洋卓・洋燈・生活・ピヤノ・パパ・ママ……と、西欧風を纏いつけた言葉がちこちに見受けられるが、「エプロン」もその一つとして登場している。そしてその翌年には、西欧文化の花香をふんだんにとりいれて時代の最先端を装っていた、東京銀座のカフェの女給たちのユニフォーム

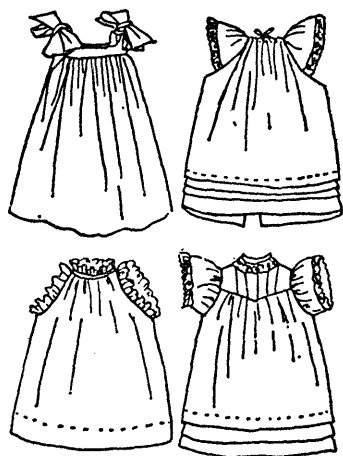
ムとして、和服に白エプロン姿が現われる。かつての鹿鳴館時代の西欧そのままの洋装に凝るのではなく、庶民の生活により親しく招き寄せられた「西欧」が、「白エプロン」という形で、女給たちの姿にやさしく馴染みやすいモダン<sup>モダン</sup>の色彩を与えたのである。

服の和洋におかまいなく園児たちがかけた白エプロンもまた新しい時代を彩るモダン<sup>モダン</sup>のしるしにちがいはなかった。男たちが、その名も真新しい「カフェ」で、一服の憩いとともに新しい感覚<sup>センス</sup>に浸る悦びを感じとったように、新時代の装いに敏感な母親たちは、愛児の姿を通して、洗練された異国性を身近に味わたったのであろう。

ところで、女性用エプロンは、西洋においては十六世紀の頃より、レースの縁どりや刺繍飾が付けれ装飾品としての役割を帯びるようになり、十七、八世紀に至っては、晴着として宮廷で用いられるほ

どに、その装飾性を開花させたという。びったりと身体に付着させる衣服そのものではなく、もっとさりげなく、付けはずしの可能なエプロン。高価な布地を使い重厚なデザインをほどこすドレスとは違い、薄地の柔らかな、淡々しい色合の布を用い、それに見合う繊細で軽やかな飾りを旨とするエプロン。エプロンは、女性の日常の暮らしから生まれ、手軽な、それだけにドレスにはまねのできない戯れを許す、装飾品としての生命を開いてきたのだった。

園児らの小さなエプロンも、エプロンが自ずと開示してきた装飾性を、フリルやギャザーやリボンで勢いっぱい表現する。しかし、それもとリわけ女の子に快く受け継がれたのではないだろうか。フリルやリボンで飾られた女兒四人が思い思いに花を摘むグリーンナウェイ風の洒落た扉を付した『子供服の新しい型とその裁ち方』(大正十三年)は、「日本人の子供に似合う西洋の新しい型、真似損って西洋人に笑



エプロンのいろいろ  
 (図は明治37年、39年の家庭の友及び43年の婦人画報による)

はれないやうに善い趣味で可愛らしくて軽快な……子供服を作らんとする人のために最も進んだ参考書」と謳いあげ、やはりいくつかのエプロンの作り方を紹介している。が、そこには「男児はなるべく飾りなどなく簡単な型がよろしい」との一句が添えられているのだ。

母親である女性は、寄せ来る洋風文化の波に自身を浸らせるだけでなく、子どもに美しく愛らしく洗練された色合を帯びさせることで、よりいっそう新しい文化の波に乗ろうとした。その際、エプロンの軽やかな装飾性は、母親の手を介して女の子により確かに受入されたのである。それは、時代の新しい美意識と呼応すると同時に、洋の東西を越えて、女性の裡に潜む装飾への想いをくすぐる何かに衝き動かされてのことではないだろうか。エプロンは、洋風文化匂いたつ時代のしるしとして、また女性に連綿と繋がる美意識のしるしとして、園児の服装史に一つの小さな足跡をとどめている。